



わたしの聖戦

女性が働くということ

143

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

地獄絵が教えてくれること

子どものしつけの一環として、最近注目されているのが「地獄の絵本」だと聞き、ああ、あれだと、懐かしい思いにかられた。

その昔、親戚の家にあった地獄の絵本。

文字はあったのか、物語として成立していたのかなど、細かいことは覚えていないが、怖いもの見たさにそつとページを繰ると、そこには地獄で苦しむ人々の姿があり、そのおどろおどろしい光景は、今でもはつきりと思い出せるほどに強烈だった。

今さら説明するまでもないが、一般的な地獄のストーリーをあえて説明

してみる。

人は死んだら生前の行いによって、地獄へ行くか極楽へ行くか、の二手に分かれる。地獄へ行くといわれたら、三途の川を渡り、着物を身ぐるみはがされて閻魔様の前に連れて行かれる。そこで、閻魔様が、その行いによってどの地獄へ行くのかを決めるのだ。

ウソをついたり、約束を破った者は煮えたる湯で何度も煮られる「かまゆで地獄」、告げ口や悪口を言った者は「針地獄」、他の人の親切に感謝しなかった者は、竜の口に閉じ込められる「竜の口地獄」、自分勝手な振る舞いしたら「火の

車地獄」、そして人の物を盗んだ者は「火あぶり地獄」である。さらに、動物や虫をいじめたり殺したりした者には、同じように生きながらにしてからだを切り刻まれる「なます地獄」というのもある。



地獄絵本の人々は、地獄の鬼たちに、焼かれたり刺されたり食べられたり……。その残酷さはちょっと他ではみないほどに徹底していて、はじめてそれらを目にしたときは、地獄へ行くことになった

らどうしようと本気で恐れたものだ。

地獄道は、仏教の六道のひとつで、その原型はインドにあるという。地獄絵は、日本に仏教が普及しはじめた平安時代から描かれてきたらしく、本来の目的である大衆教化のみならず、日本文化にも多大な影響を与えた、とのこと。

改めて大型書店で地獄絵を探したところ、それらが「アート」「日本芸術」のコーナーにあったのも納得できる。

確かに、これは子どものしつけにはうってつけかもしれない。こんな悪い行いをする地獄で酷い目に遭うのだと諭す

のは、なかなか説得力がある。ネットでは、脅しでしつけるのは反対、との声も聞かれるが、まあ、それほど目くじら立てることでもなからうに……。と思ってしまう。なぜなら、大人になれば、嘘を

ついたり約束を守れなかつたりすることは珍しくなくなる。告げ口悪口もさほど罪悪感を感じない人の物を盗むことはまずないにしろ、たいいていの大人の日々は悪行したりされたり、という現実の中にある。地獄へ行かなくてすむ人なんて存在しないだろう。

ところで、地獄絵があれば極楽絵もある。両方がセットになっているものもある。極楽本では阿彌陀様がいつでも守ってくださる、まさに夢のような世界が描かれている。しかし、こちらの内容はあまりに穏やかすぎて面白みがない。刺激がなさすぎる。激しい人生を送ってきた私には、たぶん極楽は物足りない。

地獄で勇ましく生きてみたいと思ってしまう自分に気づき、地獄絵はやはり子どものためのものだとしみじみと悟った次第である。

イラスト・伊藤栄章